

第15回 癒やしの環境研究会愛知全国大会参加の記録

瀧田正亮 西川典良 京本博行
高橋真也 末廣 豊*

大阪府済生会中津病院 歯科口腔外科 大阪乳児院*

抄録

発表演題：「高齢者の癒やしとポリファーマシーの問題ー 食の観点から」, 「食と癒やしー症例から示唆される基本事項」および「ハンディキャップを背負った子どもたちへの癒やしー子どもたちからのメッセージ」。高齢者の癒やしにはポリファーマシーの問題が立ちはだかっていること, 癒やし環境の改善には個人の生活リズム (時間医学等) の改善も看過できないこと, そして障がい者 (児) の癒やしには医療者もともに命の尊厳性を見つめることの重要性を提示した。

Key words : 食, 口腔感覚, 情動, 命の尊厳性

はじめに

癒やしの環境研究会 (Japan Society of Healing Environment) は医療・福祉現場を人間としての尊厳を守る「癒しの環境」に変えるため, 1994年, 日本医科大学医療管理学教室内に設立された会であり, 自己治癒能力を高めることを目指した癒やしの環境づくりを趣意として, 学際的な研究を続けている¹。本年度第15回全国大会に参加したので, われわれの発表抄録を提示して本会の報告を行いたい。

発表演題 (抄録)

演題1 「高齢者の癒やしとポリファーマシーの問題ー 食の観点から」

目的: 心身の衰えが進む中で他疾患併存・多剤併用傾向となる高齢者に対しては副作用, 合併症率や医療費の点からポリファーマシーの問題は大きい。また, 高齢者の誤嚥性肺炎の原因には口腔衛生の問題だけではなくポリファーマシーによる口腔乾燥, 食欲不振とそれらによる低栄養との関係も指摘されているため, 高齢者の「食」と癒やしとの観点からこの問題を取り上げたい。

方法: ポリファーマシーについて, ①最近のマスコミ報道, ②厚生労働省HPでの関連事項, そして③自験例を資料として提示し, 他疾患併存・多剤併用高齢患者の「食」と癒やしについて考慮すべき点について

追究した。

結果: ①マスコミ報道では, 「ポリファーマシー外来」の実績報道, 「処方のカスケード」とともに「引き算処方」や「減処方プロトコール」の必要性と医療者の認識不足に対する指摘の記事が目された。②厚生労働省HPでは, 高齢者医薬品適正使用検討会が2017年度は7月現在計3回開催され構成員からの情報提供とともに課題検討事項, 認知症患者抗精神病薬における米国FDAの警告後のわが国の処方減少率: 0% (英国: 63%減) とするデータ等が閲覧できた。③自験例として直近1ヶ月間の外来患者で「薬を飲むために食事をしています」と言われた80歳以上の患者4名の処方薬は平均16.8剤/日であり, 「食事が美味しくないと訴えられた70歳代の患者の処方薬は32剤/日であった。

結論: 生理機能や精神機能が低下する高齢者では当然腎機能低下に伴い薬物排泄能も低下し, 薬物の相互作用は2剤との併用については研究が進んでいるものの3剤以上になると予測不可能になると言われている。一方口渇等口腔の感覚機能に影響を及ぼす薬剤は700種以上知られており, ポリファーマシーへの対策と予防なくしては高齢者への「食」の喜びと癒やしは導くことができないのではないだろうか。

演題2 「食と癒やしー症例から示唆される基本事項」

目的：食のもたらす癒やし効果には計り知れないものがある。一方では食生活や生活習慣の乱れ、高齢者におけるポリファーマシーの問題は、知らず知らずのうちに食のもたらす癒やしの効果にブレーキをかけているのではないだろうか。顎・口腔にはストレス症状として種々のものが表出されるので、経験例からこの問題を取り上げたい。

方法：日常的な経験例として、食生活や生活習慣の改善により訴えが消失または改善した2例を提示し、食と癒やしについての基本事項について今一度振り返り検討した。

症例：症例1. 5X歳、男性。1年前より上口唇内側のネバネバ感および両側上顎臼歯部頬粘膜の腫れぼたさを訴え内科より口腔神経症の疑いとして紹介来科された。口腔所見：異常を認めず。考慮すべき背景要因：単身生活、仕事のストレス(++)、朝食欠食。経過：食事指導を行い味噌汁一杯を朝食として常食するようになり約1ヶ月後に訴えは10/10→4/10(NRS: Numerical Rating Scal)に、体重56Kg→60Kg(身長170cm)、血圧160/90mmHg台→130/80mmHg台となり、食欲も改善した。症例2. 7Y歳、女性。6ヶ月前から舌の灼熱感を訴え、内科より紹介来科された。既往症：4年前に脊柱管狭窄症の手術歴がある。舌・口腔粘膜には異常を認めず舌痛症と診断した。背景要因：稽古事でのストレス(三味線の師匠)。経過：ながら食べ(テレビ)を止め味わって食事をするよう指導したところ、1週間で訴えは消失し夕食が美味しくなったと笑顔で答えられた。

考察：2例に類似した例は日常的に来院されるが、この2例の共通点は当方の指導を真剣に受け入れられ実践されることにより症状が改善もしくは消失した点である。食と癒やしの効果の追究には、時間医学と口腔感覚機能に基づいた生活習慣の実践を時代の環境変化に流されないようにもつことがまず重要と考えられた。口腔感覚と口腔症状は、脳の種々の機能に直結することへの理解が食による癒やしの効果を高めるのに必要である。

演題3「ハンディキャップを背負った子どもたちへの癒やし—子どもたちからのメッセージ

目的：「癒やし」をキーワードとして様々な試みが行われ貴重な効果が得られている。一方ではハンディキャップをもった乳児、幼児、児童、生徒への癒やしの取り組みについてはどうであろうか。人生におけ

る重要な発育・成長期にありながら十分な言語コミュニケーションが得られにくいことから必要とされる癒やしが得られていないことが危惧される。身近な経験例からハンディキャップをもった子どもたちへの癒やしのあり方について取り上げたい。

方法：私たちが関係する肢体不自由児施設の子どもたちを対象として、子どもたちの心理・行動面から癒やしを必要とするメッセージと考えられるものを提示し、対応について検討した。

結果：歯科検診受診者60名中車椅子53名、ヘッドギア装着者11名、経管栄養を受けている者2名であり、子どもたちからの癒やしを求めていると思われる心理・行動的メッセージとしては早食い、呑気症、歯ぎしり、自傷行動、嘔吐、指吸等である。これらに対して、関係スタッフが寄り添うこと、歯科受診時には挨拶、褒める、会話の成立に務めること、煎餅などの歯ごたえ感のあるものを与える等の助言、これらを模索しながら一人ひとりにあった接し方を行っている現状である。

考察：歯科検診、口腔ケアという静的な健康管理面だけではなく、小児の人格形成に大きな影響を及ぼす食育を通しての癒やしのあり方への配慮が必要であり、味覚性快情動の発現によりどこまで効果が得られるかを常に課題としてきた。それには子どもたち一人ひとりへの十分な観察とそれに即した対応が必要であり、そこにはマニュアルに従う以上に子どもたちの表情への注視とそれに対する優しさが必要であると考えられた。虐待やいじめ等負の社会現象の抑止にもつながる課題としたい。

考察—癒やしの環境研究会の視点から

発表演題1は高齢者におけるポリファーマシーと健康被害について、高齢者医療に大きく立ちはだかる問題²として提示し、この領域における本邦の立ち遅れの実情を医療者相互の共有認識事項として訴えた。殊にポリファーマシーは化学感覚・感応にも弊害を及ぼすことが明らか³であり、口腔感覚機能とそれに関連する高齢者の尊厳性の面からもポリファーマシーへの認識無くしては癒やしの環境改善にはならないことを発表した。テーマ「食と癒やし」は、癒やしの環境研究会では以前よりポジティブな研究発表が多かったが、本題のような問題提起とネガティブな面の情報共有も必要と思われた。発表演題2では、「食と癒やし」の環境への創意工夫に取り組む以前に個人の日常生活における生活リズム、特に時間医学⁴や口腔感覚の入力

系・出力系の仕組みと情動の面への配慮⁵が必要であることを述べた。本邦では国民の食生活の乱れが指摘されて久しく、本演題に関連して国民の食卓のあり方も見過ごすことができない。発表演題³は言語コミュニケーションの取りにくいハンディキャップをもった子どもたち対して、医療者の接し方を全員で考えようとするものであった。

このハンディキャップをもった子どもたちへの配慮については、折しも障害者への殺傷事件（2016年7月神奈川県相模原市知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」）が起これ⁶、また幼児・児童の虐待が増加する本邦の社会環境⁷を憂慮しての学校歯科医としての発表とした。特定疾患を対象とした支援活動が各医療機関で盛んに取り組まれ、中でも癌患者への取り組みは本研究会でも中心テーマであった。そのような流れのなかで、発表演題³は言語コミュニケーションのとれない出生時から既にハンディキャップをもった子どもたちへの癒やしも忘れないで欲しい、という願いを込めての発表であった。これら子どもたちの癒やしを求めている（癒やしが欠如している）と思われる心理・行動的メッセージとして早食い、呑気症、歯ぎしり、自傷行動、嘔吐、指吸等を報告し、指吸が原因となり極度の歯列不正による開口（上下前歯が咬合・接触困難）となった顔貌写真を提示したところ、「この子は将来どのようになるのでしょうか」との質疑が出された。子どもたちの現実の悲惨さに対して真剣に質疑がなされた点に本演題の意義が感じられた。今後も更にこれらハンディを背負って成長していく子どもたちにも癒やしの環境が目指されるよう希望する次第である。一方、癒やしの環境研究会の設立主は「自己治癒能力を高めることができる癒やしの環境づくり」であるが、関係者が尽力するあまり上から目線になってしまうと、演題³のもつ課題には解決の糸口を見失ってしまうことが危惧される。医療者も子どもたちも同等に与えられた命の尊厳性を保有しているという視点が、必要であると思われる。

ところで、癒やしの環境研究会では設立当初よりユーモアや笑いの普及を患者の自然治癒能力の向上に尽力してきた経緯がある¹。このユーモアや笑いとわれわれの担当領域である口腔の保健との接点について食の観点からも追加しておきたい。おいしさは、飲食物摂取に際して起こる味覚や嗅覚などの各種感覚の統合の結果生じる快情動であり、至福感、喜び、うれしさ等

で表現され、にっこりする、うなづく、等の顔面表現が表出される⁸。一方笑いの表情は喜びの表情に類似しており⁹、食から得られる快情動は笑い・ユーモアから得られる症状緩和や自然治癒能力の向上¹⁰に共通することが示唆される。これらは、Yamamotoらの嗜好性味覚刺激で疼痛閾値が上昇し、嫌悪性味覚刺激で疼痛閾値が低下するという報告（ラットを用いた研究）¹¹ やわれわれの経験例^{12,13}からも窺える。しかも、これらの味覚嗜好性は上位脳が障害されていても、おいしさの判断に関与する延髄や視床下部の機能が維持されていれば、味覚性顔面反応からおいしさの表情は十分に観察され得る¹⁴ことは、人の尊厳性にもかかわる生理機能としても評価されるはずである。

社会保険診療報酬支払基金発行の月刊基金にもユーモアによる人間性の尊重、自己治癒能力の向上、等から医療費を削減させようとする記事¹⁵が掲載されており、癒やしの環境づくりの研究活動は様々な領域にネットワークを形成してが拡大されている。

結 語

第15回 癒やしの環境研究会愛知全国大会発表演題を報告し、人の尊厳性に結びつく口腔感覚・生理機能について情動の面から追究した。

本報告の要旨は第15回癒やしの環境研究会愛知全国大会（2017年8月26日・27日豊明市）で発表した。

参 考 文 献

1. 癒やしの環境研究会. <http://www.jshe.gr.jp/>
2. 松下雅弘編著：ポリファーマシーの実態と問題点、加齢による生理変化と老年症候群；高齢者のポリファーマシー 多剤併用を整理する知恵とコツ. 南山堂, 2016, 東京, pp2-8, 9-15
3. 富田 寛：薬剤性味覚障害；味覚障害の全貌. 診断と治療社, 東京, 2011, pp316-345
4. Cornelissen G, Grambsch P, Sothorn RB, et al: Congruent biospheric and solar-terrestrial cycles. J Appl Biomed, 2011. 63-102.
5. 阿部啓子：日本における“食と健康”研究－味覚科学の位置づけ. 日本味と匂誌, 2016. 23: 89-94
6. 相模原障害者施設殺傷事件. ja.wikipedia.org/wiki/
7. 厚生労働省報道発表資料. 2016年8月 www.mhlw.go.jp
8. 山本 隆：おいしさと食行動；楽しく学べる味覚生理学－味覚と食行動のサイエンス－. 建帛社, 東京, 2017, pp118-131
9. 雨宮俊彦：ユーモア理論を概観する；笑いとうもろ

の心理学. ミネルヴァ書房, 京都, 2016, pp99-175

10. Norman Cousins: Anatomy of an Illness (as Perceived by the Patient). N Engl J Med 1976. 295: 1458-1463
11. Yamamoto T, Sako N and Maeda S: Effects of taste stimulation on beta-endorphin levels on lat fluid and plasma. Physiol Behav, 2000. 69: 345-350
12. 瀧田正亮: 終末期緩和医療における口腔感覚・摂食機能の重要性. Ajico News, 2004. No.214: 1-8
13. 瀧田正亮, 木下昌毅, 西川典良, 他: 「食」・味覚とSOL (Sanctity of Life) -高齢者口腔癌患者の抗癌剤治療非適応例. 日本味と匂誌, 2015. 22: 411-414
14. Steiner J E: The gastofacial response: observation on normal and ancephalic newborn infants. Symp Oral Sens Percept, 1978. 4: 254-278
15. 高柳和江: 笑いで医療費をさげよう. 月刊基金, 2017. 58: 2-4

The 15th Congress of the Japan Society of Healing Environment

Masaaki Takita, Noriyoshi Nishikawa, Hiroyuki Kyomoto
Sinya Takahashi and Yutaka Suehiro*

Department of Dentistry and Oral Surgery, Saiseikai Nakatsu Hospital
Osaka, Infant care home Osaka*

We presented three reports in the 15th Congress of the Japan Society of Healing Environment. Title: "Polypharmacy for elderly patients; perspective of eating and healing", "Eating and pleasure ; conditional chronobiology" and "Healing and/or pleasure for handicap children; message from them". We discussed them, from focusing of oral physiology relation with behavior and the sanctity of human life.